九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

女性主導の近親相姦 ： 円地文子『鹿島綺譚』論

張, 亜璐
九州大学大学院地球社会統合科学府: 博士課程

https://doi.org/10.15017/2557102

出版情報：Comparatio. 23, pp.23-32, 2019-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

女性主導の近親相姦―円地文子『鹿島綺譚』論―

張　亜璐

一、はじめに

円地文子の『鹿島綺譚』は一九六三年一月から八月にかけて、「鹿島綺譚」「鶴の羽」「鋭目の女」「水母」「俄荒れ」「黒い渦潮」「笑い面」「海の鶴」という八篇に分けて「文藝春秋」に連載され、一二月に文藝春秋新社より刊行された。

九州地方の鹿児島西北部（注一）を背景にし、広洲家の近親相姦を主題としたこの小説は、阿久根市（注二）をモデルとするという説がある。円地は一九六二年に阿久根市を二回訪問したことがある。はじめて訪れたのは春で、文藝春秋新社講演班の一人としてであった。また、その年の晩秋に再び訪れて三日間滞在していた。当時、円地の案内役として、ミーちゃんと呼ばれた、野生の鹿の世話をしていた折田稔が『鹿島綺譚』の中に登場する鹿守りのマアちゃん（筆者注　広洲正武）のモデルという（注三）。折田は「私の家系について近親結婚のように取上げられたのは困る。全く関係ありません」（注四）と円地に対し稍々不満そうに語ったというエピソードもある。

近親相姦のモデルがあるかないかはともかくとして、円地は『鹿島綺譚』の中で、近親相姦を独特な視点から描いている。学界における権力争いと女をめぐる三角関係から、近親相姦の主題を導き出し描いているこの小説は、円地の円熟期に差し掛かる一九五〇年代以降の作品であり、年を重ねていくとともにロマネスクな作風が徐々に展開されてきた代表的な作品だと言えよう。

小説は女子大学生の伏見英子が同じ研究室の講師吉崎努と同級生勝目奈彦とともに、隠れキリシタンを研究するため、鶴が降り立つという鹿児島西北部の比留万を訪れることから始まる。彼らはこの旅を通じて、広洲家の末裔である由香と「知能の遅れている」鹿守りの息子正武を知り、広洲一族の近親相姦といった習性もその事実を書き綴った秘録を保管している田代医師を通して分かるようになる。吉崎と勝目は秘録と英子をめぐって激しく争い合うが、英子は二人と離れて再び比留万を訪れると、正武は神託を伝える者として、由香は新興宗教の教祖のような存在として、比留万の人々の信仰の対象となっていた。英子は由香に選ばれて正武の花嫁候補として迎えられ、子を妊るが、以前から正武と関係のあった海女の寺脇てる子によって殺される。

従来の先行研究においては、長篇小説としての構成の工夫の不足を指摘している論評が多い。例えば、河上徹太郎は学界の暗闘、近親相姦の問題、新興宗教の問題といったプロットの組合せが巧妙であるが、「結果として一つの長編の理念にまで盛り上って来ないものがある」（注五）と批判している。また、単行本化された際、奥野健男は「余りに筆が走り過ぎ、構成が強引になってしまっている」といった「長篇の瑕瑾」（注六）を指摘している。ただし、先行研究では近親相姦というモチーフについては深く論じられていない。

本稿では、『鹿島綺譚』における近親相姦を、円地の小説に頻出する性的モチーフの興味深い表現の一例として検討する。その際、女

性による主導権の獲得という要素に注目したい。

二、円地文子と近親相姦というモチーフ

近親相姦といえば、人間社会において普遍的な禁忌（注七）であることがまず思い起こされるのであろう。心理的にみれば、ジークムント・フロイトもハヴェロック・エリスも近親相姦が人間固有の本能であり、幼少期に父母およびその他の近親の異性に対する欲情を感じることがごく自然で異常ではないこと、それを非とする理由は社会制度や優生学上の分野に求めなくてはならないことを指摘している（注八）。また、ジョルジュ・バタイユが主張しているように、「禁止は犯されるためにある」（注九）のであり、怖ろしい、触れてはならない禁忌であればあるほど、それをあえて破り、侵犯する欲望も抑えられなくなる。

近親相姦はこういう神秘的な魅力のためか、重要なモチーフとして、しばしば文学作品の中で扱われる。日本文学における近親相姦の例を挙げてみると、父娘間では長塚節の『土』（一九一〇年）、久生十蘭の『無月物語』（一九五〇年）、坂口安吾の『女剣士』（一九五四年）、母息子間では石坂洋次郎の『続石中先生行状記』の「不幸な女の巻」（一九五三年）、叔父と姪の間では島崎藤村の『新生』（一九一九年）、また、同父母兄妹間では黙阿弥の戯曲「三人吉三廓初買」（一八六〇年）、異父母兄妹間では国木田独歩の『運命論者』（一九〇二年）等々、枚挙にいとまがない。

円地も近親相姦というモチーフにかなり興味を持っているようである。作家としての不遇の時期を経て、戦後になって再出発した際、近親相姦を主題とする小説を多く創作している。例えば、甥との恋が描かれている「松風ばかり」（一九五五年七月）、息子との近親相姦に関する「パンドラの手匣」（一九五八年二月）、養子への情愛が描写されている「花散里」（一九五七年八月～一九六〇年一二月）、近親相姦の問題が隠見している「終の棲家」（一九六二年一月～八月）、養子が愛情の相手となった「小さい乳房」（一九六二年四月～八月）、義弟との密通についての「化粧」（一九六四年七月）、また母子相姦ともいえる「小町変相」（一九六五年一月）などが挙げられる。

小さい頃から父方の祖母から影響を受けて日本の古典文学に親しみ、小学生の時からすでに有朋堂文庫の『源氏物語』を読み始めた円地は、平安朝の物語の世界からさかのぼって、『古事記』『日本書紀』などの影響により、性のタブーに関する物語への関心を寄せたのであろう。源氏物語のヒロインたちについての清水好子との対談からも円地の考え方がうかがわれる。

清水　紫の上のほうでは、光源氏が自分を奪うがごとくに連れてきて、こんなに大事にしてくれる、そのいっさいの源は藤壺にある、ということをぜんぜん知りませんね。

円地　あんなに気の回る人なのに、おしまいまで知らない。

清水　どうしてでしょう。

円地　タブーなんでしょうね。触れちゃいけないことだったんじゃないかしら。

清水　現代小説だったらお触れになります？

円地　私だったら、触れるでしょうね（笑）。

清水　おもしろいところですね。

円地　藤壺と紫の上は叔母と姪でもあるし……（注十）

源氏および藤壺と紫の上の関係を興味津々に語っている円地の、性的タブーの主題に対する関心がうかがわれる。その関心は円地の多くの小説のテーマに具現している。特に本稿で取り上げた『鹿島綺譚』の近親相姦のモチーフは、従来の多くの、自己愛かナルシシズム（注十一）、あるいは抑圧された近親相姦の願望（注十二）に因む近親相姦の小説とは異なり、一種の選民意識に由来する。

近親相姦と選民意識の関係は人類の起源、あるいは高貴な血統の発祥に遡ることができる。これは世界各地の神話によりすでに十分に証明されている。古代日本を例として挙げると、『古事記』によれば、日本の起源にイザナギの神とイザナミの神という兄妹間の交合が機能している。天皇家は皇室の血統の純潔性を守るため、同じ血縁の成員同士の結婚が避けられなかったのである。古代エジプトにおいて、王族成員は王族以外との結婚で王族としての神聖性を喪失する恐れがあったため、王族内の兄妹婚が奨励された。こうした天皇家または王族のように、内部の成員を結婚の相手とする形で表現した選民意識によって、高貴な血統を保持すること、権力を維持すること、しかも自らの絶対的な権力が侵犯されないようにすることが実現できた。また、澁澤龍彦によれば、アメリカの作家、ジョン・アップダイクは「強姦は下層階級の、姦通は中層階級の、近親相姦は貴族階級の性的罪悪である」と述べている（注十三）。近親相姦は高貴な血統の純潔性を守るといった選民意識のための有効な手段である一方、選民意識は近親相姦の伝承を保障し、その存続の後押しとなる。両者は補い合って成し遂げて、互いの不可分の関係を示している。

広洲家の代々受け継ぐ近親相姦という習性も、まさしくこういう関係性に基づきつつ、名家を存続させるという大義と結びついた選民意識に由来し、「神格化」（注十四）した広洲一族の中に定着して存続してきたといえるのである。

三、広洲家の男性主導の近親相姦

「俗の世界は禁止の世界である。聖の世界は限定された違反にみずからを開く。それは祭の世界、至高者と神々の世界である」（注十五）とバタイユがいうように、広洲家は近親相姦を通じて「神格化」された一族として築かれる。

初代家長の五郎兵衛はもともと「明国の士大夫」であり、明の亡びた後、日本に逃亡してきたのだが、薩摩藩の領主に重んじられたため「密貿易の王者」になって、広洲家という豪族を築いてきた。ところが、「故国への望郷の念」を補うために、初代五郎兵衛は五十歳代の時、故国との唯一の繋がりである娘の芳美を迎え、彼女と近親相姦の関係を結んだ。その後、鎖国の禁令が厳しくなりつつあり、初代五郎兵衛の父娘相姦を嚆矢として「故国の血にまつわる執着」による近親相姦の伝統は子孫に代々継承されており、十五代五郎兵衛まで続いてきた。

こうした広洲家の近親相姦の歴史を見てみると、注意しなければならないことが浮き彫りになる。それは、長い間、誇りの高い一族

として存続してきた広洲家は家父長および長子の家督相続制度によって支えられており、男性が近親相姦に対し、絶対的な主導権を握っているということである。主として描かれるのは父娘相姦、異母兄妹相姦、同母兄妹相姦という三種類の近親相姦の様態である。

まずは、父娘相姦の場合を見てみよう。初代五郎兵衛が「再び帰れない故国への望郷の念」を芳美に託しているため、彼の芳美に対する扱い方はほかの妻妾や彼女たちに生ませた子供とは全く異なった。

手の中の珠をもてはやすように寵愛し、衣類も常に紋緞子や繻子に刺繍したものを用いさせ、居室の調度や寝台も特に明国風に造らせて、その内に芳美を置いて見るのを楽しみとした。

初代五郎兵衛は父親ではなく男性の立場から芳美を見て、まるでおもちゃのように自分の好みのままに彼女を扱った。これは家長として持っている権力を家族成員にふるう一つの表現ではないかと考えられる。彼は芳美と父娘相姦の関係になって彼女に息子を生ませた。

次に、初代以来の「覇気に富んだ人物」と言われている、幕末の五郎兵衛の本妻の次男喜四郎と妾に生ませた春乃の間に発生した異母兄妹相姦についてである。喜四郎は次男でありながら、「長男よりも遥かに嘱望していた知恵才覚の」青年である。彼の実母が亡くなって春乃の母に後見され、春乃の母に対してエディプス・コンプレックスを徐々に抱えるようになった。また、喜四郎は春乃の母に寄せた好意を「母親に瓜二つの若い春乃」に感情移入をした。一方、選民意識が近親相姦の伝統にしたがい代々伝わってきたゆえに、春乃には子供の時からすでに「自分の一族のものが他の男より好ましく思われる癖」があった。父親にエレクトラ・コンプレックスの思いを抱いた春乃は父親によく似ている兄に愛情を感じるようになった。平然として家族の成員を愛情の相手として狙う二人は毎回逢引きの時、弁財天の祠という神聖な場所を選ぶ。

既に近親姦という重大な禁を易々と乗り越えるほど情熱にあおられた二人には、神域を犯すことなど何でもなかったらしいのである。(中略)二人の逢引きはいつも弁天堂の狐格子の内部の狭い床で行われた。春乃は自分達の秘かな愛の床を潔めるためにそっと箒や手桶を持出して、自身で弁財天の像の安置してある床を清掃し、唐繻子や緞子の色美しい布団まで運びこんで像のうしろに隠していた。

春乃は積極的に「愛の床」を丁寧に清掃したり、「色美しい布団」さえ運び込んだりするなど、受け身として兄との近親相姦の関係への受け入れを余儀なくされているようには見えない。ただし、受け身ではないとしても、春乃は決してイニシアティブを取る方ではない。妾腹の春乃と、長男の代わりに次代の家長になる可能性の高い喜四郎とでは、立場が大きく異なるため、喜四郎が春乃および春乃との関係に対して肯定的な態度を取っているからこそ、春乃と兄との近親相姦が可能なのだと考えられるからである。

最後に、十五代五郎兵衛と同母妹由香の近親相姦を見てみる。時代の推移とともに、十五代になると、広洲家が徐々に没落するようになり、十五代五郎兵衛は「潔癖の性質」から近親相姦の習性を「わが家のこの上ない汚辱の歴史」として深く恥じ、近親相姦への嫌悪が表されてきた。にもかかわらず、若僧の早川の登場を口火として、五郎兵衛は由香が早川と忍んで逢ったことで嫉妬心を起こしたあげく、由香を犯した。

五郎兵衛が由香を犯したのは、そういう狂おしい嫉妬の跳梁の間であったという。そうしてそのことが終わってあと、初めて五郎兵衛は由香の身体を噛むように強く抱きしめて、「こげんするより法がなかった……おいは由香をあんにせ（青年）にやりとうなかった……」

十五代五郎兵衛の方から最初に兄妹相姦の関係に踏み込んだのは明白なことである。家長であってこそ、近親相姦を忌み嫌いながらも実行に移すことができたのであろう。由香が二十七歳になっても結婚しないのは兄の嫉妬のためであると考えられる。

ところで、近親相姦の伝統を存続させるためには、それをタブーと見なす世間の目からその事実を隠さなければならない。隠すには男性主導であることも大きく関係した。家父長の家族制度であってこそ、家長の意思を尊重し、堕胎や、近親相姦に生まれた子供の父親の身代わり探しなどの方法が順調に行われたため、タブーが隠されたのである（注十六）。

このように、広洲家に代々継承されてきた近親相姦の伝統の中では、家長や家長の地位に近い男が近親相姦における主導権を持ってきたのである。

四、広洲家の主導権の変化

しかしながら、時代の推移につれて没落してきた十五代の広洲家は男女関係が逆転する一面を迎えてきた。それは十五代五郎兵衛の妹由香と深く関わっている。

先に述べた通り、十五代五郎兵衛と由香は広洲家の近親相姦の宿命から逃れられなかった。ところが、彼らは近親相姦の関係を結んだ後の反応が真逆である。

（引用者注　十五代五郎兵衛は）おいおい声を上げて泣いたという。そうして由香自身も兄の無軌道な所業を憎むよりも、自分達は結局こういう関係に運ばれて来る宿命だったのだと、安堵に似た気持ちに憩うことが出来た。

広洲家の近親相姦の伝統に嫌悪感を持っているのに、自ら禁忌を越えた十五代五郎兵衛が「おいおい声を上げて泣いた」一方、由香は今までの広洲家の決まっている運命に勝てるはずがないと思い、「安堵に似た気持ちに憩うことが出来」、平然と近親相姦の伝統に乗ったのである。

やがて由香は妊娠し、堕胎しようとする。「広洲の家の唯一人の血筋を絶やすな」と兄に厳しく阻止されたため、絶望で投身自殺を通

して兄の意思に反抗しようと思ったが、失敗してしまう。結局、「知能の遅れている」正武を出産し、選民意識により由香は彼に対して「継子みたいに冷たい扱いをしていた」。

十五代五郎兵衛が亡くなった後、広洲家の末裔として、由香と正武は二十年来貧しい暮らしをしてきた。ここで注意しておくことは、由香対正武の関係が、今までの女対男の弱対強の関係から逆転したことである。このきっかけは家計のために鹿守りとして仕事している正武が鹿を守ることで見物客に暴行された後、急に海の「俄荒れ」の来襲を正確に予言できたことである。

こういう正武の神がかりの能力で、由香は「あの子は神さまの授かり子だった」、「この子は世の人の苦労を救う為に神さまが授けて下さった」と世間に宣伝するようになる。それは正武の託宣の能力を広洲家の復興の手段に仕組もうとする由香の企みである。何度も託宣の正確さが証明された後、由香の宣伝の効果により、正武は多くの信者を集めてきて尊敬されるようになる。これを契機にして由香の血統に対する強い矜持は、はけ口が見つかったように高まってきた。単なる正武の背後に支える存在として満足できず、自らも「息子を助けて、自分の神の声を弘通したい」と考え始めたのである。選民意識による「神格化の自信」を生かした自分の巫女的なものを発揮した由香は新興宗教の教祖のような存在になった。没落した広洲家も再び繁栄するようになってきたのである。

日本における二千年近い民間信仰習俗の歴史の中で、巫女は見過ごしてはならない存在である。近世末になると、もともと名もなき巫女は神がかりの力をもって大勢の信者を集めて教祖となり、新興宗教を発展させたという。これが日本社会における巫女教（注十七）である。由香は正武の神がかりの能力により、選民意識にさらなる確固たる自信を持つと同時に、巫女性を政治性と関連させようとする野心にも徐々に燃えるようになる。

母親の由香を前にして、正武は広洲家十六代家長の相続人としての権威が全くない。仕事を済ませると、まず母親に丁寧にお辞儀をした。

「おっかさん、御機嫌さんで……」

「ああ、お前も達者でよか……」

母子の関係は「主従のよう」な関係である。また、他人から正武に神がかりのことを聞かれるとしても、彼はまず「恐れるようにちらりと由香の顔を見」て、由香は「何でも話せというように頤で強くうなずいて見せた」後、正武は許可を得たように回答する。

こうして由香は自分対正武という男女の力関係の中で完全に逆転して、正武を凌いだ存在として広洲家の物事を決めるようになってきた。

やがて、由香について世間からの批判の声も出てくる。

自分の方が女行者か、神子さまみたいにしゃんとして、御託宣を聞きに来る人達にも全部まず自分が応対するんです。この頃、由香さんにも神さまが憑りうつるとかいう話だけれども、これは眉唾じゃないでしょうかね。兎も角あの人が、今まであんな

仕事師とは思わなかったって皆言いますわ。まあ一種の神さま商売でしょうね。この頃では結構お賽銭で食べて行けるって話ですわ。

世間から正武を傀儡にして「神さま商売」をする由香への不満が出てきている。お嬢さん育ちの由香は「華奢な身体では、仕立物をしても、人の家へ手伝いに雇われて行っても月の中一ぱいを働き通すほどの体力はない」ため、「神さま商売」の仕事をする前に「仕事師」とは完全に言えない。それでは、何故そういう仕事に熱心に力を注いでいるのであろうか。

それはやはり広洲家を存続させるという使命感によるのである。息子の正武を単なる道具と見なす由香は、彼の神がかりの能力を利用して新興宗教の形で没落してきた広洲家の復興を実現することができた。それと同時に、由香は広洲家を男性主導ではなく、女性主導で立て直そうとしたと言えるのである。

五、由香が主導する二重近親相姦

奥野は円地の創作意図について、由香が「息子の正武を夫として神として独占できるよろこびに夢中になる怖ろしくも気高い夢を描きたかったのだろう」（注十八）と述べているが、小説の結末ではそういう由香が兄との間の子供である正武との二重近親相姦を主導することが暗示されていると考えられる。

由香の正武に対する性的主導権の確立を分析するにはもう一人の女主人公である伏見英子について論じなければならない。

英子は東京のR大学の大学院生であり、当時の時代におけるエリートであるが、「現代気質の女」として、実に計算高い。

英子は本能的に男を好きになる質ではなくて、いつも自分に向けて来る相手の熱量を計算するほどの分別と自信を持っている現代気質の女であったから、現在のところ、彼女の秤は吉崎の皿の方に重く傾いていた。

彼女にとって、男を選ぶ基準は愛情の大きさではなく、自分の利益になるかどうかである。「水母」のように吉崎と勝目の間で揺れていることはそれによるのである。

英子は吉崎や勝目と「容易に性愛を分かち合えるようで、実は少しもお互いの愛情に潤うもののない渇きに荒れている」ころ、「現代の男女の実相」から離れたくなり、再び比留万を訪れる。この時、教祖の地位に立っていた由香は新興宗教の政治力を強化するために、英子のエリート性を利用しようとして、彼女を正武の花嫁にしようと目論んだ。

英子は、正武の嫁として選ばれたことに対し、身にあまる光栄と思い、

「私、鹿島へ行きます……私、呼ばれて来たのですわ」

という。計算高い英子は、自分がエリートであることを利用しようとする由香の意図を見通さないはずがないし、近代社会の知識層に

いる英子はそれを批判することも容易なのに、何故このような態度を取るのであろうか。

何故こんな男の花嫁になる為にこの人気のない小島に来たのか。一つにはそれは由香という女の現代離した気魄に満ちた魅力に英子は意識して惹き入れられたことなのである。（中略）

自分でも知らぬままに何かの能力を内に潜めている由香の底深い青淵のような静かさに魅力を感じた。

由香の魅力を感じていると同時に、正武の妻として今までの生活から縁を切ろうとする英子は、神を売る仕事に興味を持つようになる。

英子はこの時ほど、自分の生きて行く前途をはっきり見たことがなかった。（中略）彼を教祖に仕立てて、自分がその解説者になる事業は充分やり甲斐のある仕事に思われるのである。（中略）由香の巫女性と政治力の交り合ったインテリ女性には決して見られない逞しさが恐らくはこの仕事を予想外に発展させるだろう。

科学的に解決できないことが存在している以上、運命や未来などを神がかりの力を以て予言する現象が恐らく続いているかと思われるが、それと同時に「合理的な大衆社会のインテリ層の増加と、新興宗教の隆盛が比例するような不可解な現今現象」が起きている（注十九）。知識層の一員の英子が神さま商売を生き甲斐のある仕事と考え、取り組もうとすることも、この「不可解な現今現象」の一つであろう。

しかし、由香と英子のそれぞれの企図がすべて英子の死によって破滅になった。英子が寺脇てる子によって殺されたのである。

東京の大学に在籍している、知識階層としての英子。それに対して、「漁村の娘」であり、観光客に海のものを見せる海女としてのてる子。生い立ちの面でも、教養の面でも、違いの大きな二人は全く関係のないようにみえるが、正武をめぐって恋愛のライバルになったのである。

正武に好意を持っているてる子は、由香と正武の神がかりの能力を信じ込んで熱心に彼らに奉仕している。ところが、由香の「政治的に身を動かそうとする時に内心に起る革命の常規を逸した残忍さ」によって、海女の身分であるてる子は堕胎させられた。そのため、てる子は正武の嫁として選ばれた英子に対して恨みを抱くようになったのである。

物語の流れとして、後半の物語の主人公になりそうな英子が突然死の結末を迎えることは意外なことであるが、別の視点からみれば、結果的に、鹿島の地元住民として、地元の近親相姦の伝統を遮断する外来者の英子を亡きものにした、てる子の行為が広洲家の近親相姦の伝統を守ることになったのである。さらに、言い換えれば、広洲家の近親相姦は他人に阻止されることなく、運命的、必然的なものとして存続することになったのではないかと思われる。

英子の死体を前にして由香に表れている素気無さが印象的である。

「ああ、やっぱし英子じゃった……」

と由香は吐息をつくように言った。

英子によって、正武との間に広洲の血統を継がそうと企てた願いは仇になったのである。やっぱりこの女は広洲の嫁となる資格のない女だったのだ。由香は死体に向かって爪弾きした。

「英子」ではなく「死体」に「爪弾きした」由香は、広洲家にすでに価値の無くなった英子に対する軽蔑の気持ちを露骨に表している。英子の死で正武の嫁はいなくなるため、あらためて人選する必要があることについて、由香は正武との二重近親相姦について、次のように考える。

もう仕方がない……やっぱりそうするより道はないのだと由香はつぶやいた。（中略）すべての他人が卑しく、せせこましく見えた。この壮麗な日没の空と海に高く頭を上げて抱きあえるものは自分と正武との二人だけに思われるのである。

「自分と正武との二人だけ」が「抱きあえる」というのは、正武の嫁が自分にしか資格がない、という由香の高まってきた選民意識の究極の表現と言えよう。なぜかというと、広洲家の後裔に由香と正武しか残っていないため、仕方がなく二人が近親相姦という結末になるのではなく、自分が天に選ばれたゆえに、正武の嫁になって近親相姦の関係を結ぶという意味合いが含まれていると考えられる。

六、終わりに

本論文は円地文学における性のモチーフの一例として、『鹿島綺譚』で取り上げられた近親相姦を考察した。広洲家の近親相姦という伝統は選民意識に由来する。初代から十五代五郎兵衛まで、家父長制および長男の家督相続制により、男性は近親相姦への主導権を握っていた。ところが、時代の変遷につれて、広洲家の没落とともに、広洲家の末裔である由香が息子正武の神がかりの能力を利用して自分の巫女的なものを発揮し、新興宗教の形で広洲家の復興を実現しようとした。同時に由香が主導権を取ることにより、広洲家の男性主導の伝統は女性主導に取って代わられた。由香は選民意識を堅持し、息子との二重近親相姦によって家の存続を画策しているのである。

性的モチーフを含んだ円地の小説においては、女性が積極的に性行動に関与し、性を謳歌しているように描かれる場合が多い。『鹿島綺譚』においては、近親相姦という特異な形態を通して、やはり女性の積極的な性行動が描かれているのである。

「注」

一、円地は「東京育ちの私には九州――殊に今度の場合は鹿児島西北部の方言を扱わなければならないので、大変骨が折れた。」（円地文子「あとがき――方言について」『鹿島綺譚』、文芸春秋新社、一九六三年）と告白している。

二、岡保生「円地文子（作家の性意識――精神科医による作家論からの臨床診断――）」（「国文学解釈と鑑賞」三九（一四）、至文堂、一九七四年）五〇頁。

三、朝日新聞鹿児島支局編『かごしま文学の旅』（三州講義社、一九六六年）を参照。

四、前掲注三に同じ。一六五頁。

五、河上徹太郎「文芸時評（上）」（「読売新聞」、一九六三年七月三〇日）。

六、奥野健男「解説」円地文子『鹿島綺譚』（集英社、一九八三年）二三六頁。

七、クロード・レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』福井和美・訳（青弓社、二〇〇八年）を参照。レヴィ＝ストロースは「我々は文化と自然という相容れない二つの次元に属す矛盾し合う属性を、規範および普遍性という二つの性格のなかに認めたわけだが、インセスト禁忌はこれら二つの性格を、いささかの曖昧さもなく、しかも不即不離のかたちで示すのである」（六七頁）と述べている。

八、大場正史『エロスの戒め』（東京ライフ社、一九五八年）を参照。

九、ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』澁澤龍彦・訳（二見書房、一九七三年）九二頁。

十、円地文子『源氏物語のヒロインたち』（講談社、一九九四年。初出は「SOPHIA」一二月号、一九八四年）八六頁。

十一、澁澤龍彦「近親相姦、鏡のなかの千年王国」（「現代思想」、一九七八年五月臨時増刊号）八頁～一一頁を参照。

十二、オットー・ランク『文学作品と伝説における近親相姦モチーフ　文学的創作活動の心理学の基本的特徴』前野光弘・訳（中央大学出版部、二〇〇六年）に詳しい。

十三、前掲注十一に同じ。八頁～一一頁を参照。

十四、テクストの引用は、『円地文子全集』第九巻（新潮社、一九七八年）による。

十五、前掲注九に同じ。九七頁。

十六、また広洲家は、鹿児島西北部の比留万という島に位置するという孤立した地理上の条件に加えて、地元の住民とは異なる名高い一族の「異朝人の裔」といった身分により、自然にもともとの住民とは心理的な隔たりを持っている。「小大名ほどの暮し向きで、町の者は半分主人のように敬っていたから、その家の奥深い秘密は庶民の口の端にのらなかった」ということも、近親相姦を隠すために有利な環境を提供していたのである。

十七、山上伊豆母『巫女の歴史――日本宗教の母体――』（大和書房、二〇一五年）を参照。

十八、前掲注六に同じ。二〇一頁。

十九、前掲注十七に同じ。一五九頁。